

江戸時代の政治・イデオロギー制度における神道の地位

フランソワ・マセ

フランス国立東洋言語文化研究所

1. 江戸時代における宗教全般の二次的位置、とくに神道の場合

神道を専門的に研究することを志している私にとって、残念なことに、神道は幕府および朝廷の関心事において、長いあいだ二次的な位置をしめてきたに過ぎない。明治維新の際の祭政一致の政治がもたらした宗教界の栄光の時期は、この神道の問題にかかわる観点をゆがめてしまっていることが多い。江戸時代の初めには、朝廷は宗教全般の問題に介入する手段をもたず、また、確立したばかりの幕府は、宗教界の刷新に手をつけようという意志は殆どなかった。幕府の基盤は江戸時代をつうじて宗教問題でなかったことは明らかである。各将軍個人個人の信仰問題を別にすれば、この時代の幕府による宗教の扱いは、大体次ぎの三つの軸にわけられると考えられる。

第一問題については、天海から東照大権現の位をうけた江戸幕府を開いた徳川家康の神格化によって、徳川という新しい家系の地位を安定させること、第二に、キリスト教を撲滅させること、第三に、社会の安定を確立させること、である。

第一に、家康の死後の称号は戒名で、葬儀祭礼の責任は、間接的に山王神道の枠内での天台宗が受け持った。ただ、この神道と仏教の集合の色合いを強くもつ、天台宗により厳しい統制をうけていた山王神道は、歴代将軍から格別の配慮を受けることはなかったことに注意したい。この山王神道は、江戸時代の神仏習合の傾向をもつ神道流派のなかでおそらく最も活動的であったのであるが、近代の神道の諸流派と対等に競い合う力を持つことは決してなかった。

ところで、第二番目の点について、キリスト教徒の追放のために挙げられた理由の一つは、天正15年（1587）6月19日に豊臣秀吉の発令した伴天連追放令にはっきり示されているように「日本ハ神国たる処」の概念であった。それにもかかわらず、キリシタン狩りの試金石の役をはたしたのは神道ではなく、仏教である。

資料：天正15年（1587）6月19日豊臣秀吉の伴天連追放令「日本ハ神国たる処、きりしたん国より耶法を授候儀、太以不可然候事」

伴天連追放令をさらに強化して、慶長17年（1612）家康はキリシタン禁止を発表する。

社会の安定という三番目の点については、その根底にあるのは言うまでもなく儒教である。しかし儒教以外の思想界の他の思潮も、公共の秩序を乱さない限りは、統制は受けながら、かなりの自由がゆるされていた。

ところで、政治面の展開を考察して気づくことは、徳川幕府の体制を支えていた本当の意味でのイデオロギーが、存在しないという点である。儒教は支配層を思想的に導き、エリート形成の基盤を築くが、真の意味での正統性を構成することはなかった。形而上の問題を相対化することを許す、儒教、仏教、道教についての中国の書物のイミテーションである儒仏神という

三教が日本で流行した理由はそこにある。

それにもかかわらず明治維新の時に、大きな役割を果たした、祭政一致、尊皇などという概念は明確にイデオロギーの定義にあてはまり、またそれが平田派神道界から出現したことを忘れることはできない。その時、聖徳太子の時代以来、日本で始めて宗教政策が積極的に行われた。それ以前に江戸幕府を含めて時代ごとの政府の政策は現行維持であった。

2. 現行維持の基本原則と刷新の拒否（身分の維持、先行事項の維持から古式への復興の動き）

他のほとんどすべての分野同様に、宗教の問題に関しても、幕府は体制順応主義に徹し、権力による介入は、教義面ではなく、公共秩序とその安定化の面のみで行われた。清原貞雄が述べたように「何時も新規に創むる事は幕府の喜ばさる所、常に保守的態度を採り」というようであった。同氏はまたいう「幕府の神社に関する制度は寺院に関するものと画然たる区別するものではなかった」と。幕府は寺院と同じように、神社の創建又拡張はこれを禁じた。

この保守的態度に大きく関連してくるのが身分制度の問題で、公共秩序の維持と身分の維持をどのようなかたちで結びつけて行うかが、幕府にはおおきな問題であった。一例をあげれば、農民と神主の問題である。幕府権力は、農民が神主の身分を獲得することを身分制度の許す限り極力おさえている。たとえば、富士講の御師の場合、清原貞雄『神道史』「付録―徳川幕府神社に関する制度」などがあげられる。又、土崎昌則は武蔵国の多くの例を沢山あげている。

史料：高埜利彦「移動する身分―神職と百姓の間」(朝尾直弘篇『日本の近世7―身分と格式』) 土崎昌則『神社史の研究』桜楓社

この現行維持政策は神道界の組織にも現れる。室町後半以来神位、神号の授与権および祠官の補任権利を独占していた、「神祇管領長上」と自ら名乗った吉田家は、江戸時代を通じて、神社の厳格な統制を意図する寛文5年7月(1665)諸社補宜神主法度により強化された。この地位は延宝2年8月の「覚書」で確認されている。しかし吉田家は、白川家という競争相手の存在を認めなければならなかった。貞観8年(876)親王が神祇伯となる例は多くなった。永萬元年(1165)花山天皇の後裔額弘王の任伯以後は、その子孫は白川伯王家を名乗り、神祇官伯を世襲する。このポジションによる白川家の正統性に疑いををさむことは、もちろんゆるされない。雅喬王は寛文9年(1669)霊元天皇の命により「伊勢三箇之御伝授」を献上し、同年「鏡御拝御相伝事」を著している。幕府も白川家にはとくに伯の役料三十石(百俵)を下している。伯家はもともと松尾、稲荷、広田、日御崎の諸社の執奏を担当してきたが、社は少なかった。吉田神社への対抗のため学頭を置き、さらに垂加神社の影響を受けた雅富王の代の宝暦4年(1754)に伯家部類を編纂。配下の諸社や入門者も増加し、吉田家と同様神拝式許可、風折烏帽子、浄衣、白指袴などさまざまな許可を出し、文化13年(1816)の「神祇伯家学則」は伯家神道の概要を記している。その書の編纂に協力した平田篤胤は天保11年(1840)に学頭を委嘱して、伯家神道は国学の影響も受けるようになった。

白川家の影響下にあった地域は広くはなかったが、江戸末期には朝廷で占める地位のために付加的な権威を獲得している。しかし、この点でも白川家は、神社に送られた「神道裁許状」

をみる限り、天正年間以降、神職に神道裁許状を授けはじめた吉田神道が神道流派として組織していったその例にならったに過ぎないと考えることができる。つまり幕府による神社の統制は、各流派の教義の統制を想定してはいなかったのである。

3. 最小限の介入、公共秩序の乱れ、幕府の権威問題の再検討

宗教的観点から言えば、島原の乱の鎮圧、そしてキリシタンの弾圧のための軍事活動をのぞけば、幕府の政治は日常的事件を扱うにしかすぎない。幕末もおしせまると、たしかに緊張感が強まる。しかし、平田篤胤は、『天朝無窮暦』に関わる事件によってであって、彼の直接に宗教的な著作物のために制裁を受けたのではない。もっとも、暦は中立的な正確のものではなく、篤胤による暦の出版は単なる口実に過ぎない可能性が強いが、表面的には宗教的な事件ではなかった。

この事件以前、神道に関わりのある事件としては、個人の、あるいは二神社間の利害に関わる口論レベルの性格をこえた事件はごく稀だと言って良い。その例として、潮音と賀茂規清の場合があげられる。

神仏習合を表看板にすることが通用しなくなっていたときに、潮音（1628－1695）は、その立て直しに努力した。儒教の古典を学んだ後、潮音は黄壁宗に近付き、吉田神道、忌部の伝等にも関心を示した。潮音は天和元年（1681）に『先代旧事本義大成経』あるいは『大成経』『物部神道』あるいは『太子流神道』と言われる書物を抛り所にして、自分の神道、すなわち霊宗神道を創唱した。この『大成経』という書物を流布させたことにより遠刑に処された。しかし、將軍の母桂昌院の世話をしていた時代から潮音を知っていた綱吉の計らいにより、刑は50日の謹慎に軽減された。

問題の書物は1676年（延宝4）に出版されたものだが、その内容に反幕府のスローガンはない。ただ、伊雑宮の神職永野妥女（1616－1687）の影響下にあったと思われ、伊勢神宮が天照御神の住居であることを否定した。そのため、神官の神職が訴え出ている。庶民の間に広く流布したこの潮音の教育の宗教色の濃さが、権威者の側からの反応の強さを説明している。その口実として用いられたのは偽書の著述というものである。

潮音の教育は、神儒仏の三教融和に依拠した『大成教来由』『霊宗全書』『参元全書』『宗源神道』を撰述した偏 無為・依田貞鎮（1681－1764）により受け継がれた。告発された潮音の著作は、新たに延宝8年（1680）に『憲法本紀』あるいは『五憲法』の名で出版され、しばしばこの書名で流布し続けたのである。この潮音とその後継者による教育活動は、とうに天台僧乗因（1683－1739）によって知られている。比叡山にいた時、一実神道の伝授、山王の山家要略氣を授けられた乗因は、関東の東叡山を通して、ついに、信州に身を寄せた。戸隠で潮音が残した『大成教』の教えに依拠して修験一実霊宗神道を信州戸隠で自ら開いた。乗因は天台による灌頂の独占を非難して、信州の住民の間である程度の人気を得たが、非議を企て異法を好んだという理由で、東叡山からの訴えにより八丈島に追放遠流の刑を受けた。乗因は八丈島で没するが、後に恩赦された。結局、この事件は神道の問題ではなく天台宗の内部の問題で終わった。

またもう一つの事件は、偶然か否かは別として、同じ土地で同じ刑を受けている。その中心人物は上賀茂の神職の家から出た賀茂規清（1798－1861）で、従五位上 飛騨の守の地位にあって、十二年間深山幽谷を跋涉すること、三十三国に及んだという。この規清は神道、天文学、暦数、陽明学、禅学に関心をもち、弘化3年（1846）に江戸にでて居をかまえた。そして江戸下谷の池之端に瑞鳥園を創り、そこで、吉田神道をモデルにしておこった賀茂神道の教えに個人的関心事をくわえて作った神道を教育した。

規清は神道を語ることで満足せず、神代を現在、そして彼が貧民救済活動を通じて救済し教育しようところみた庶民の日常問題にも結び付けようとするばかりではなく、幕末の多くの儒学者がそうしたように海防、沼地開発問題にも論を広げようとした。それが卓抜な経世論を幕府に上書するという形にまで発展し、政治問題への直接の介入ばかりでなく、規清の主張が民衆の間で幅広い支持を受けたために寺社奉行が介入し、賀茂規清は幕府の忌諱という理由で弘化4年（1847）4月に投獄され、嘉永元年（1848）八丈島に追放遠流されている。

賀茂規清は錦袋円という丸菓を創製し、浅草で寛文年間に活躍した儒者である了翁のケースに驚く程似通っている。というのは、大衆レベルでは、多くの要素が示唆しているように、公共の秩序が尊重される限り、信仰統制は緩やかであったからである。

4. 武士階級と神道

これまで、いくつかの神道にかかわる具体的事例をとりあげてきた。ここで私が扱おうとするのは、神道に関心をもつのは誰か、そしてその目的は何か、という二点である。神社の神職が彼ら自身の意見をもつことは、彼等の仕事に直接かかわることで当たり前どころかかんがえれば、当然のことながら、他の職種にある人々の場合はどうなのかという疑問が生じる。

ところで、武士階級の間に神道がどの程度浸透していたかについて少し検討してみたい。神道の分野で名を挙げた有名な武将の例は見られない。はっきりと指摘できることは、殆どが武士であった儒者による神道についての考察は頻繁で、その数は相当である。まず、藤原惺窩は、神道が古代中国の聖人の道以外の物ではない事を主張して、この種の考察を始めた。林羅山は惺窩と同じ事を言うのであるが、それがかの有名な、しかし不明瞭な「理当地神道」である。また『古史通』のなかで批判的能力と実証的な精神を見せ、『古史通或問』のなかで最初の記録のなかの神々の行動を人間による劇的行為の美化化でしかないと見た新井白石は、徂徠学派に批判と攻撃を与える目的で吉田神道を指示した。また、熊沢蕃山、貝原益軒、またもっと後の時代の帆足万里などの儒者に近い立場の学者は、神道に中国の古典の教えの反映しか見ない。

しかし他の儒者の場合、そんなに簡単な説明ができない。たとえば、山鹿素行（1622－1685）は、『先代旧事本義大成経』の成文化と伊雑宮復興の計画に参加した忌部坦斎の弟子であった。しかしそれ以前に高野山按察院光宥のもとで両部神道を学んでいる。儒教を林羅山のもとで学び、兵学を小幡景憲に学んだ素行にとり、神道を学ぶとは何を意味したのだろうか。

晩年に朱子学を捨てた素行は、寛文9年（1669）に素行自身の儒教と神道の個人的な集大成である『中朝事実』を著している。その中で素行は、日本を世界の中心とみなし、日本こそが中国、中朝であると主張して、後に国学の枠内で大きな発展を見る古学と同等の展望を見せ

ている。

不可解な梵舜と家康の関係にしても同様で、吉田神道の伝授はどのような意味をもっていたのか。この吉田神道の伝授は何故行われなかったのだろうか、等の疑問が生じる。仏教や儒教に深い関係で繋がれていた武士たちは、一般論で言えば神道と特別な関係を持っていなかった。

5. 皇室周辺の結晶作用現象と古学

よく知られているように武士と同じく、庶民の宗教は習合宗教であった。長い間に日本のほとんど全ての住民にとって純粋な宗教、純粋な信仰は意味をもたなかった。

他方、天皇と朝廷は、次第に儀礼の繰返しというただ一つの論理の枠の外へ出て行くようになる。また、古い秩序を象徴化する機関や儀礼と同じように、安定の回復が建造物の修復によって示されるはずだという感情により部分的に説明される全般的な修復の動きが現れる。そこから、幕府と朝廷の間に、式年遷宮、伊勢への奉幣（正保3年）、大嘗祭（貞享4年）、その他の朝廷儀礼の復元にかんする了解が取り交わされたのである。

この動きは次第に強まり、その性格を変えて古式への回帰は、起源にたいする古くからの魅惑、元本宗源神道を自称する吉田神道の教義のなかに取り入れられ体系化されたかの有名な『倭姫命世紀』ばかりでなく、国学者の間に取り入れられる前に儒者の伊藤仁斎、そして荻生徂徠に引き継がれる古学の動きを背景に受けてイデオロギー的色彩、さらには神学的色彩を帯びようになる。

吉田神道の直接の影響下に、かなりの数の公家は伝承（部分的には秘伝の形をとるが）、文献の推敲作業によって新しい流派を組織し始める。そのうちの幾つかの公家はより広い基盤を求めて、たとえば土御門家は、日本全国の陰陽師を管理して吉田家により統制される神社に比較できる組織網を作り、白川家はもともと彼等の下位にあった吉田家と理論上直接の対抗関係にある。吉田家は慶長年間に吉田神道の中心であった大元宮の近くに神祇官代といわれた神祇官の八神殿を建設する許可を得ることに成功するが、白川家もそれに対抗して彼等の屋敷内に八神殿を建てている。

朝廷儀礼に関しては、この両家は殆ど対等の対抗関係にあったと言えるが、神社の統制に関しては、吉田家は幕府が倒れるまで大きな統制権をもち、行政面での統制においては最も大きな影響力を持ち続けた。

神道をめぐる問題で朝廷に与えられた操作の余地は、ごく限られている。幕府との間に結ばれた古式の儀礼の復興にかんする了解がある。幕府は式年遷宮に必要な経費を部分的に負担し大嘗祭の復興を許可したが、平安時代に行われていた大通りを練り歩く行列はゆるさなかった。吉田家、白川家ばかりでなく、土御門家の儀礼に関わりのある家は吉田神道の例に倣って流派として組織し、秘伝を行った。

平安時代の有名な安部晴明の跡である陰陽頭土御門泰福（1655-1717）は、垂加神道や伊勢神道などの例に基づいて土御門神道を興している。朝廷は刷新の場ではないが、それを受け入れ、発展させる。そのため、神道界の諸流派は朝廷の承認を得ようと様々な努力をした。山崎闇齋は正親町公通（1653-1733）の仲介により（山崎闇齋に神道誓文を提出し）、その教え

を朝廷に持ち込むことに成功している。その結果、吉田あるいは伊勢神道の秘伝の道を開くことを意図していた山崎闇齋は、逆説的に彼が興した垂加神道が朝廷内で秘密に伝授されるという事態に遭遇する。

また、関白一條兼輝家と正親町公通は、後西上皇に垂加神道では最も重視されるこの事と関連し、風水草を献上したが、これを読んで上皇が秘伝として伝えるべきとしたため、以後公通の教えが正親町神道と称されることとなる。また兼輝の子、関白一條兼香は霊元、東山、中御門の三天皇に神号を奉った。神号、つまり垂加神道から着想を得て生存知中に神格を得る天皇が現れるという重要なことは、霊元天皇（1654-1732）まで待たなければならなかった。

この正親町神道すなわち垂加神道は、朝廷に流行し、尊皇思想を覚醒させ、その後の祭儀再興運動の一発点火ともなったのである。このことは、ある意味で思い掛けない展開であったといえる。その結果として、神道と特別な関係を持たなかった武士が統治する江戸時代の社会で、しかも実証主義が盛んであったこの社会において、神代の時代に、すなわち日本という国の源に遡ることをと唱える神道は、新しい社会を統一するひとつの力になったのである。

【Abstract】

The Position of Shinto in the Politico-Ideological System of the Edo Period

François MACÉ

INALCO

Inside the so-called military politico-ideological system of the Edo government religion occupied a secondary, not a central, place. This applies to Shinto as well. Also, inside the structure of religion as a system of beliefs, the position of Shinto was secondary. Although Christianity was attacked and denounced, it was not Shinto but Buddhism, which took up the role. Yet, at the same time, it is a fact that like other social institutions during the Edo period Shinto acquired close control by the Edo authorities. To put it concretely, the control was focused on the territories of the shrines, which represented the larger part of its income. The social position of the Shinto priests in the hierarchical system of Edo society was close to that of the warriors (*bushi*). The method of control was not connected with a newly accepted by the Edo government decision, but preserved the already existent from the previous system form. For example, the priestly position, as before, was limited to those born in a priestly family for generations, i. e. continued the same system of inheritance. With other words, this means that the point of the governmental political system was focused not toward the beliefs of Shinto, but on the control of its system only. In the same way the Edo government was absolutely indifferent also to the internal ideological and religious

movements in Shinto. And it was not for ideological reasons that it chose Yoshida Shinto as a partner for negotiations in the quality of Temple and Shrine Magistrate, an institution for direct control over the political system of the Shinto world. Simply, from the 15th century on Yoshida Shinto was chosen to occupy the position of a superior in the Shinto world. Yet, it was a special exception that the Edo government positively made Nikko Higashi Terumiya the object of its politico-ideological control. From one side, the existence of Nikko Higashi Terumiya established for the Edo government the place of Confucian ancestral worship inside the cultural space of Japan. On the other side, this made it possible to ensure a “speedy” reaction to Ise - the ancestral shrine of the imperial family. At the same time, this problem became the important factor for the examination of the relation between the government and the imperial family. For example, on the one hand, the government revived the traditional ceremonies of regular reconstruction of the shrine of Ise and the Daijou-sai during the Coronation ceremony, etc. On the other, it is clearly a revival within the diapason of a strong governmental control, expressed in the entrusting of the responsibilities for the Ise Jingu reconstruction to the monastery Keikou-in, as well as in the omitting the ceremony outside of the palace (where people could take part) in the revived Daijou-sai. And here the government, carefully arranging its policy of control, chose to render the responsibility of control over the Shinto world not to Shirakawa Shinto, which had a close relation with the imperial family, but to Yoshida Shinto. Yet, in this we read not an ideological reason, but the systematic control of the Edo government. And it probably gives one more explanation to the question why the Edo government did not oppose very much Old Shinto and the prosperity of the idea of reverence for the emperor.